

な舟山群島新区の開発目標を実現する。
舟山群島新区の発展とともに、筆者もこの地域におけ

る文化産業と海洋民俗文化の持続と変容の視点から、研究を深めていきたい。

バンクーバーにおける^{ハニ}韓人(韓国移民者)達の食文化研究

李 徳雨
(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)



2014.1.25 (土)～2.14 (金)までの21日間、非文字資料研究センターの派遣研究員として、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学アジア学科を訪問し、バンクーバーでの韓国移民者(以下、^{ハニ}韓人)達の食文化に関して調査を行った。言語と共に母国文化として続いている食文化は、継承力がある非文字文化として数多くの移民者が守っている文化でもある。

カナダへの韓国人の移民は、1960年代からの宣教、留学、西独への看護師・鉦夫移民者の第2次移民をはじめ、1985年以降、「投資移民」と呼ばれる移民までできてきて韓人は増加し、現在カナダ全土に約23万人の韓人達がいる。バンクーバーでの韓人が最も多かった時期は、1990年代後半で15万人にまで至るほどであった。この時期は韓国でのIMFや、早期留学ブーム¹(英語を勉強させるために子供の時から留学させること)などで海外への移民が一番多かった時期であったが、2000年代半ばから逆移民で韓国に帰る人々が増加し、2014年現在、バンクーバーでの韓人は約8万人程度であると推定している。

調査期間は20日間と短く、50余年間の韓人達の食生活を把握することは簡単なことではなかった。バンクーバー移民は、他の国の移民より経済的に余裕があつて、食生活面では思ったより苦勞しなかったという話をよく聞いた。また1960年代から1980年代にやって来た韓人の大多数は西洋食(カナダ食)に憧れがあり、西洋食に適応しながら機会があれば韓国料理を食べたという話もあった。しかしながら1980年代後半から1990年代にかけては、バンクーバー移民者の食文化での分岐点になるともいえる。その理由は韓国人移民者の増加、さらに韓国人移民者の需要に伴って大型スーパーマーケットが登場したためである。以前まで韓国食材を購入するには各地の数少ない韓人が経営する食料品屋(グロサリー、grocery)に行つて高く買うしか方法がなかったが、大型スーパーマーケットが登場してから、低価格で

韓国食材を買うことができるようになったためである。この点が今回の調査を通じて知り得た、バンクーバー韓人の食文化の中で一番印象的なことである。

現在コキットラム(Coquitlam)に位置するコリアンタウンには、ハンナムスーパーマーケットとHマートという大型スーパーマーケットがある。この大型スーパーマーケットが登場したのが1990年代後半であった。この大型スーパーマーケットはコリアンタウンを形成するきっかけになって、その周辺に韓国料理屋や雑貨店など約60店舗ほどが出来た。またこの大型スーパーマーケットの内部は、韓国の大型スーパーマーケットと品物や雰囲気には大差はなく、韓人達が愛用しているよう



写真1 コキットラム(Coquitlam)に位置するコリアンタウン



写真2 韓人会館での旧正月祭り

¹ 韓国での早期留学ブームは、1997年以降、急速に増加し、2001年には7,000余名、2005年には2万名を超えた。



に見えた。この現象はカナダ食と韓国食の境界を無くすことであったともいえる。この現象は「カモメ家族（超国籍家族、Transnational family）」として知られている移民現象と関係がある。カモメ家族とは早期留学をさせるために母が子供を連れて父と離れて移住する家族をいう。このカモメ家族は1990年代以降に増加した新たな移民文化であり、このような移民者増加が以前の移



写真3 旧正月の食べ物

民者に食材購入の容易さを与える結果にも寄与したのではないかと思う。このように母国の食材を購入することは、移民者達の食生活の中で最も重要なことである。自給自足社会ではない限り、食材を購入するという食文化が母国の食文化を絶えることなく存続させ、またその環境も創っていくのだと思う。



写真4 韓国人が経営している寿司屋

派遣研究記



譚 静

(歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程)

北京という町に対して、私は昔からずっと好印象を持っていた。勿論北京は中国の首都であり、歴史・政治・文化などの中心である。また様々な夢を持っている人々が憧れる魅力的な街である。それだけでなく、北京は様々な文化が交流してきた心の広い街であるために私の好きな街であった。そのため、今回の神奈川大学非文字資料研究センターと北京師範大学文學院・民俗学与文化人類学研究所の交流プログラムの一環として3週間にわたって派遣研究に参加する機会をいただいたことは、非常に幸運であった。

北京師範大学文學院の前身は中国語言文学部であり、中国で最も歴史のある中国語学部の一つである。2003年5月に設立された。北京師範大学文學院は、前身である中国語言文学部の豊富な資料を基にさらなる発展をとげている。現在、文學院に所属する研究所が合計11ヶ所あり、民俗学与文化人類学研究所はその一つである。

民俗学与文化人類学研究所は、大学の主教学棟の7階にあり、主に3つの研究目的（民間叙事学、民俗志学、歴史人類学）を設定している。そこは、歴史文献の整理

及び使用を重視すると共に、フィールド調査を通じ、資料の収集や民間生活の観察及び体験をすることを強く主張している。

私は、過山系ヤオ族の儀礼に用いられる信仰神が描かれた掛軸（神画）の研究を進めている。そのため中国人研究者によって行われた過山系ヤオ族の先行研究を明確にすることを目的とし、そこから自らの研究が、長いヤオ族研究史の流れの中のどこに位置づけられるのかを明らかにすることが、今回の派遣の目的であった。今回の調査は、主に民俗学与文化人類学研究所のデータベース及び大学図書館に所蔵している文献資料を基に展開した。今回の調査を通して収集した中国人研究者及び調査団体により行われたヤオ族の調査研究内容は、以下のようになっている。それを時期を分けて簡単にまとめてみた。また各時期において、調査時、調査地、調査者及び団体の順に示している。

● 1920年代～日中戦争開始（1937年7月）

1928年5月～7月／広西省大ヤオ山／広東中山大